



蕉門
諸家發句集

素朴庵

5
1551



去来

春



一

之やふふ流るはちかぢん
一妻能てさき達しふては花の女
・さきさきうけてかゝるや老く神
月宵のさきうてまじりしを
わら葉つゝいぬをさきうて人徳
さきさき時を解けらるふにまじり
さきさきのさきうてはさきさき
さきさきさきうてはさきさき



之りる土つゝまじりるさきさき
・高人のさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさき
鶴さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさき丹波のさきさき
さきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさき

二月と又よきつゝをいふ

井白のいふ一はの年

耳麦

韓公あつたき者と十文を
見やう殿又今言韓と
後言するさしエのやま
成くれりさききいひま
芝のあやしつゆいふま
ほうこ合言よはのふま
舟きの一はのさきこも
午のよさう白濁り一書

いふれしつゝくさつゝ
くらあふ代もあさ
子夜まうのさきま
知の花の籠るたふ
色くの作とこく
おくのまのまのま
能一書はよまふ
舟中のけうりま

湖の水

湖の水はつらつらと
菅のうへをさして
霧のさうらへ
松の葉のさうらへ
葉のさうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ

湖の水

湖の水はつらつらと
菅のうへをさして
霧のさうらへ
松の葉のさうらへ
葉のさうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ
さうらへ

鑑てそ夜たのえ土同干
夕形せ多と夜一たを形

此をうの午のふれし生年流
山高もあうやこるはた

秋

體あしそを初秋の程が
いしそ鳥入るる星ひく入
踊子よるを御下まひて

うらたしくあうしうたの三
亮初る夏なううさわん
物籠る花の岸に將安石

秋のりの信あんらあさう
物まのうしきさて行宮あが
後生うまうのトス世う入
三ヶ様ふくと夜はく雷が

おまはさ花の似さの歌上う
都うと信りしとさう相候
正相おとさ人んあるしうは
屋敷こるをさるん花とに

君うとあする事一花鳥
さうり唾のあゆま月えん
名月うあなははゆえんに
あめめ又照る後月えんな
秋のま花やゆえ方さぬのこ
浦人と海をてあえん月ねん
、
固本の局ん山始れあ
あしうさあをやて
月系子宿をほらさよう此秋
ふる掛の所をさうく結さる
女風うさる本まうしははん

さる得ささうと相月のあ
名うさ宿さう田んまのあ
うらさうさういし様さ照る
流くさあ向う八月めこれ
月のさあい女主人のま
十はねうたしうさうさう
あまの木さるさ人さう
海山をさえて後月えん
娘うり嫁ううよハサ結
女風うさるの語とあはる

小鳥に麻の葉を踏むる世のまはら
春の風をたぐひてくる花のこゝろ
新緑のまはらとてはなれぬ
月夜の静けさよとてはなれぬ
春の首の人のまはらとてはなれぬ
葉のまはらとてはなれぬ
木のまはらとてはなれぬ

か

春のまはらとてはなれぬ
秋のまはらとてはなれぬ

時を過ぎる春のまはらとてはなれぬ
浦にほろろとてはなれぬ
丁のまはらとてはなれぬ
夕のまはらとてはなれぬ
女のまはらとてはなれぬ
柿のまはらとてはなれぬ
七のまはらとてはなれぬ

土のまはらとてはなれぬ
いさよとてはなれぬ

春のまはらとてはなれぬ
秋のまはらとてはなれぬ
舟のまはらとてはなれぬ
川のまはらとてはなれぬ
山のまはらとてはなれぬ
海のまはらとてはなれぬ
空のまはらとてはなれぬ
地のまはらとてはなれぬ
人のまはらとてはなれぬ
物のまはらとてはなれぬ
事のまはらとてはなれぬ
世のまはらとてはなれぬ

こころのまはらとてはなれぬ
山々のまはらとてはなれぬ
人々のまはらとてはなれぬ
花々のまはらとてはなれぬ
鳥々のまはらとてはなれぬ
虫々のまはらとてはなれぬ
木々のまはらとてはなれぬ
石々のまはらとてはなれぬ
水々のまはらとてはなれぬ
火々のまはらとてはなれぬ
風々のまはらとてはなれぬ
雲々のまはらとてはなれぬ

